収蔵資料紹介　旧長瀞綜合博物館所蔵資料
～自然金・自然銅を中心として～

井 上 素 子 ・ 高 橋 美 織

受け入れの経緯

当館は平成26年３月、（財）長瀞綜合博物館の自然系資料を受け入れました。この博物館は、地元眼科医塩谷覚三郎氏の収集品を基に、昭和32年、徳富蘇峰の命名により「汲古館」として開館した博物館です。十鈴鏡（国指定重要文化財）、古瓦（県指定有形文化財）・笑う埴輪（県指定有形文化財）を含む数千点の資料を所蔵していました。昨年財団を解散することとなり、埼玉県は原則すべての資料を県立の博物館で分野ごとに受け入れることを決めました。当館は、鉱物資料15点、岩石資料７点、化石資料165点、合計187点を受け入れました。

資料を受け入れるにあたり、鉱物・岩石標本については、国立科学博物館名誉館員・名誉研究員の松原聰氏に同定を依頼しました。ここではその中で特に注目に値する資料を紹介します。

秩父鉱山産自然金

秩父鉱山では、糸状・ひも状の自然金が鉄閃亜鉛鉱に伴って産出しました。このような産状は日本全国で秩父鉱山だけという、大変珍しい産状です。主に大黒鉱床から産出し、20～30％の銀を含有しています。長さは５～10mmのものが中心です。

今回受け入れたのは、上記のような産状がよくわかる質の良い標本２点です。自然金は、最大のもので幅１mm、長さが10mm以上あります。資料目録の産地「大滝村中津川」という表記や、「中津川金鉱」というラベル、産状からも秩父鉱山産に間違いありません。秩父鉱山産の自然金は、現在鉱物標本として市場に出回ることも稀であり、非常に貴重な標本です。

自然金（秩父市中津川 秩父鉱山）
H37㎜×W35㎜×D40㎜

長瀞町井戸産自然銅

旧長瀞綜合博物館は、自然銅３点を所蔵していました。資料目録には産地が「秩父郡野上町井戸（荒川畔）」と記載されており、荒川で転石を採取したものと思われます。長瀞町井戸は自然銅を産出することが知られており、金ヶ嶽山麓銅ノ入沢沿いに位置する法善寺には、寺宝として自然銅が祀られています。

自然銅（長瀞町井戸）　H40㎜×W80㎜×D60㎜

日本初の流通通貨「和同開珎」の原料となった「和銅（にぎあかがね）」の産地は、秩父市黒谷として周知されていますが、黒谷から井戸にかけて古来しばしば良質の自然銅転石が発見されているといいます。しかし、いずれも転石であり、鉱床については、今だに謎に包まれたままです。

このたび松原氏の御厚意により、井戸における現地調査および標本の化学分析をしていただきましたので、ここで簡単に御紹介します。

法善寺には寺宝の他に御住職が長年にわたって銅ノ入沢で採集された５個の銅鉱石があります。いずれも孔雀石・珪孔孔雀石、褐色の礫状部分が複雑に混在した特徴のある岩相をしており、今回受け入れた資料と同様の産状でした。現地調査では残念ながら転石や露頭を確認できませんでした。御住職が採集されたのは銅ノ入沢に砂防堰堤ができる前とのことで、現在では土砂に覆われ、採集することは困難なのかもしれません。